The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

インド古典修辞学における詩的欠陥（doṣa）について
——ダンディン著『美文体の鏡』を中心に——

和　田　悠　元

インド古典修辞学におけるdoṣa（詩的欠陥）に関する考究はguṇaへのそれと同様に，当時の詩論家たちにとって重要なトピックであった．doṣaに関する記述はBharataの*Nāṭyaśāstra*に既に見られ，爾後一千有余年，多くの詩論家たちによって定義・分類されてきた．

Bharataに続くDaṇḍin（＝D, 8c.）もその例に漏れず，その主著KĀ第3章の60詩節を割いて，10種のdoṣaを解説している．

doṣaとは「文学，特に美文体詩（kāvya）においてその詩自体を台無しにしてしまう要素」であり，詩人にとって看過すべからざる概念である．自らも作家であるDも，その重要性についてalaṃkāraやguṇaの解説に先立って，「端正なる（sundara）肢体（vapus）も一つの白癩（śvitra）の斑点によって醜悪になる」という譬喩を用いて言及している（KĀ 1.7）．即ちこれは「詩人は詩作にあたって修辞技巧を弄して精緻な美文体を構築する前提として，まず汚点（＝欠陥）を詩中から排除すること」に腐心すべきであることを示唆しており，doṣaの排除は美文体詩作における基礎条件と言えるであろう．本稿はこうしたdoṣaを巡るユニークな議論についてKĀの記述に即して概括することを目的としている．

① apārtha（無意味）

apārthaとは全体としての意味が欠如していることである．但し惑乱者（unmatta）・酩酊者（matta）・幼童（bāla）の場合は適用されない（KĀ 3.128）．KĀ 3.129の詩例に見られるように，相互に脈絡のない4つの文が並記されている場合，apārthaというdoṣaに陥っていると見なされる．

② vyartha（無意義）

vyarthaとは文（vākya）あるいは作品（prabandha）における文脈の不一致から生じる欠陥であると定義される（KĀ 3.131）．但し，不安定な心をもつ者（asvastha-citta）の言説としては是認される．KĀ 3.132はDが示したvyarthaの詩例であるが，それは3つ文から構成されており，最初と中間の文は矛盾をきたしてはいないが，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

最初と最後の文は敵の存在に関して，相互に矛盾している．

③ ekārtha（同義語反復）

ekārtha とは同義語の反復即ち tautology である（KĀ 3.135）．但し憐憫（anukampā）等の感情の表現においては修辞上の飾り（alaṃkriyā）となると規定される（KĀ 3.137）．

KĀ 3.136 は雲を意味する“taḍitvat”，“stanayitnu”，“ambhodhara”が執拗に使用されているため，doṣa を含む詩となっている．

④ sasaṃśaya（疑惑を伴うもの）

sasaṃśaya は意味を決定するために（nirṇaya-artham）使用された（prayukta）言葉（vacas）が疑い（saṃśaya）を生じさせてしまうという doṣa である（KĀ 3.139）．但し疑いを生じさせるために使用される場合は，言葉の飾り（alaṃkriyā）となる（KĀ 3.141）．KĀ 3.140 は“ārāt”という副詞が「遠く」「近く」という両義を有するために，その語が意味を決定するために使用されているにもかかわらず，疑いを生じさせてしまうため，doṣa を含む詩となる．

⑤ apakrama（不正順序）

apakrama は統語論的欠陥である．即ち先行する叙述の順序を後続する叙述が守らないことである（KĀ 3.144）．KĀ 3.145 において，「世界の(1)維持（sthiti）・(2)創造（nirmāṇa）・(3)破壊（saṃhāra）の原因である」という形容詞と，それにかかる「(3) Śaṃbhu（＝Śiva）・(1) Nārāyaṇa（＝Viṣṇu）・(2) ambhoja を胎とする者（＝Brahmā）」という複合語において，各々の神々と彼らの司るべき職能の順序が一致していないため，この詩は doṣa を含んでいると考えられる．但し順序の認識の了知の原因としての努力（yatna）が為されるならば，doṣa とはならない（KĀ 3.146）．

⑥ śabda-hīna（正しい言葉の欠如）

正しい言葉の欠如とは，文法的な欠陥である．詩例（KĀ 3.149）において見られる avate と bhavate，mahārājan は本来それぞれ avati，bhavataḥ，mahārāja でなければならないため文法的な doṣa を含む詩節と見なされるのである．但し文法学の細かな規定に鈍い詩人の作中に現れる場合，ある程度容認される（KĀ 3.148, 151）．

⑦ yati-bhraṣṭa（中間休止を欠くもの）

中間休止（yati）とは，韻文（śloka）における韻律学（chandas）の教典に規定された句切り（caesura）のことであり，それを欠くものは doṣa となる．但しそれが耳に不快でない場合は容認される．D は Mandākrāntā 韻律（17×4）による詩例を示すが，この韻律は各詩脚の 4 及び 10 音節目の直後に中間休止が存在しなけれ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ばならないが，それを欠いている（KĀ 3.153）.

⑧ bhinna-vṛtta（不適当な韻律を有するもの）

韻文において，諸音節の不足と過剰，あるいは長短が慣例通りでないものは bhinna-vṛtta と呼ばれる（KĀ 3.156）．D は Anuṣṭubh 韻律（8×4）と Upendravajrā 韻律（11×4）の２つの詩によって，前者においては音節の不足と過剰を（KĀ 3.157），後者においては第１詩脚に不適切な長音，第３詩脚に不適切な短音が配置されているという長短の不適切性を示している（KĀ 3.158）.

⑨ visaṃdhika（誤連声）

visaṃdhika とは本来連声すべき箇所で連声がなされていないという doṣa である（KĀ 3.159）．例えば“mandānilena calatā aṅganā-gaṇḍa-maṇḍale”（KĀ 3.160ab）という文章は波線の箇所が連声して ā にならねばならないため，誤連声という doṣa を含む詩節と考えられる．他方，“māna^īrṣye iha śīryete strīṇāṃ himaṛtau priye”（KĀ 3.161）の破線の箇所は一見連声して a になるべきもののように見えるが，Pāṇ 1.1.11 の規定によって，両数の格語尾である ī，ū，e は独立に発音されるべき語（pragṛhya）とされ，連声の規則に従わなくてよいため，doṣa とはならない．同様に“himaṛtau”の ṛ も Pāṇ 6.1.128 の規定によって原形のままになっていると考えられる.

⑩ deśa-kāla-kalā-loka-nyāya-āgama-virodhin（場所・時間・技芸・常識・教理・聖言に関する矛盾を含むもの）

詩作において，場所等の一般的な常識に適合しない表現を含む詩は，doṣa となる（KĀ 3.162–164）．D はこれら各々に対して詩例を与えている.

(a) deśa に関するものとは「栴檀（candana）の香りを運ぶ」という慣用が存在するマラヤ山からの風を樟脳の樹木（karpūra-pāda）と結びつけたりする事等である（KĀ 1.65ab）.

(b) kāla に関するものとは，昼咲きの蓮華（padminī）が夜に咲いたり，夜咲きの蓮（kumudvatī）が昼に開花したりする等（KĀ 1.67ab），適切な時間に矛盾する表現である.

(c) kalā に関するものとは，インド古典劇等における rasa 理論において，rasa（情調）に対応すべき sthāyi-bhāva（持続的感情）が一致しないこと等（KĀ 3.170）である.

(d) loka に関するものは象が鬣を持ち，馬が鋭い牙を持っている等（KĀ 3.172ab），世間一般の認識に矛盾する表現である.

(e) nyāya に関するものは，インドの諸思想の正論に関する矛盾を含む表現である．例えば KĀ 3.174–5 の詩例に含まれる諸行の不滅や非存在からの創造等は

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

仏教やサーンキヤ哲学の正論に明らかに矛盾している．

(f) āgama に関するものは śruti と smṛti に矛盾することである．例えば，前者は聖火（agni）を設置せずに Vaiśvanārī 供犠祭を執行すること（KĀ 3.177），後者は認可されずに（anupānīta），即ち入門式（upanayana, cf. *Manusmṛti* 2.36ff.）を済ませずに師（guru）から諸ヴェーダを学ぶことが矛盾の例として示されている．

以上の通り，D の説示した doṣa は意味論，韻律論，文法論，一般常識や慣例に関するものに至るまで多岐に亘っている．いわば，それらは詩作にあたって詩人たちが当然踏まえておくべき基礎的教養である．それら種々の doṣa に対して D が 60 もの詩節を割いて丁寧に詩例と解説を加えているという事実も，その点を明確に証し立てていると言うべきであろう．

紙幅の都合上，本稿は註記を一切割愛し，KĀ における doṣa 論の概括に留めざるを得なかった．同書に見られる豊富な詩例を含む詳論は別稿を期したい．また KĀ における *Nāṭyaśāstra* の影響や後代の詩論家たちの doṣa 分類に与えた影響に関しても今後の課題としたい．

〈略号・参考文献〉

KĀ: *Kāvyādarśa* of Daṇḍin (ed. Böhtlingk); Pāṇ: *Aṣṭādhyāyī* of Pāṇini (ed. Śrīśa Chandra Vasu); Dragomir Dimitrov [2011]: *Śabdālaṃkāradoṣavibhāga* (Wiesbaden); D.K.Gupta [1970]: *A Critical Study of Daṇḍin and His Works* (Delhi); Yogeśvaradattaśarmā [1999]: *Kāvyādarśa of Daṇḍin*, with Several Commentaries (Delhi).

〈キーワード〉 詩的欠陥（doṣa），*Kāvyādarśa*，修辞学

（駒澤大学大学院）

NII-Electronic Library Service